

満足感と「パーソナル・コスト」

山 岸 俊 男

はじめに

本稿は、筆者が1973年7月に行なった、満足感とパーソナル・コストに関する調査結果の分析と検討、およびその調査を行なうにあたっての筆者自身の理論的関心の紹介を目的としている。まず始めに、理論的関心の方から述べて行きたいと思う。

I. 理論的関心

(1) 無意識的なフラストレーション

A. エチオーニは、1968年に発表した2つの著作の中で、⁽¹⁾通常の状態測定の結果からのみ情報を得ている限り、現在のアメリカ人の大部分は現状に満足していることになるが、多少なりともより間接的な方法を使った調査の結果を見た場合には、それらの一見満足そうに見える人々の間にも「疎外」^(?)の徴候が見られることを指摘し、通常の状態測定の結果にそれらの徴候があらわれてこないのは、それらが抑圧され、いわば無意識化されているからだとしている。すなわち、意識的なレベルでは現状に満足している人々も、抑圧され無意識化された何らかのフラストレーションを抱えていることがあり得るということである。

無意識的なフラストレーションを抱きながら、意識的にはそのことに直接の不满を感じない場合があり得るということは、エチオーニの指摘を待つまでもなく、臨床心理学、特に精神分析の立場からすれば、今更とりたてて言うまでもないことである。しかしエチオーニが強調しているのは、そしてまた筆者自身が問題としたいと思っているのは、臨床的な場面であらわれてくるような極端なものだけではなく、それほど極端な形をとってはいないが、多くの人々に共通しているような無意識的なフラストレーションである。

このような無意識的なフラストレーションを、社会学の立場から研究することは可能であり、かつまた必要であると考えられる。なぜなら、それは三重の意味で社会的な性格を有していると考えられるからである。すなわち、(1)フロイトの言うように、無意識は抑圧によって生み出されるものであり、またその抑圧はアナンケの下での現実原則によって導かれているとするなら、そしてまたそのアナンケは、マルクーゼの言うように、実際には歴史的・社会的に形成されてきたものであると考えるならば、無意識的なフラストレーションは、抑圧を生み出す一方の原因である、歴史的・社会的な諸条件によって規定されていることになる。(マルクーゼはこの過程を、実行原則という概念を使って説明している。)⁽³⁾この意味において、すなわち歴史的・社会的な諸条件によって規定されているという意味において、無意識的なフラストレーションは社会的である。(2)無意識的なフラストレーションが歴史的・社会的な諸条件によって規定されているとすれば、それは、それらの諸条件を等しくする集団(民族、階級、階層、世代等々)の成員によって共有されていることになる。この意味においても、無意識的なフラストレーションは社会的である。(3)歴史的・社会的な諸条件によって規定され、特定の集団の成員によって共有されている無意識的なフラストレーションは、その集団の成員の意識および行動に対して特定の影響を及ぼし、その集団の成員が歴史的・社会的な諸条件に対して働きかけて行く方向に変化を与えるであろう。この意味において、すなわち社会的な影響力という意味においても、無意識的なフラストレーションは社会的であると言えることができる。

筆者が最終的にめざしているのは、このような無意識的なフラストレーションが、歴史的・社会的な諸条件によってどのように規定され、どのような集団によって共有され、またその成員の意識や行動にどのような影響を与えているかを明らかにすることである。言い換えれば、筆者が最終的にめざしているのは、「さまざまな階級、階層、民族、世代その他の社会集団が、それぞれの存在諸条件に規定されつつ形成し、それぞれの存在諸条件を維持し、あるいは変革するための力として作用するものとしての、精神的な諸過程と諸現象であ

る」「社会意識の構造と機能、その形成と展開と止揚の過程を、経験的に研究することをその課題としている」⁽⁴⁾社会意識論の射程を、無意識のレベルにまで拡げることである。

しかしこれは、あくまでも最終目標であって、今回の調査の目的が、より限られたものであることは当然である。

(2) 虚偽とコスト

先に述べた、「疎外」が存在しているにもかかわらず、その存在が意識されていない状態を、エチオーニは「虚偽的 (inauthentic)」な状態と呼んでいる。この「虚偽」という概念は、いわゆる虚偽意識よりも広い範囲の内容を含んでおり、意識のみではなく、社会的諸条件に対してもあてはまるものとして考えられている。虚偽的な状態とは、個人的なレベルにおいては、「人間としての基本的諸欲求 (basic human needs)」⁽⁵⁾の充足がなされていないにもかかわらず、そのことによって生じるフラストレーションが意識されていない状態であり、社会的なレベルにおいては、実質的には（下部構造においては）成員の基本的諸欲求の充足を妨げ、大多数の成員の意思が全体の意思決定に反映されないような状態にありながら、制度的ないし象徴的には、基本的諸欲求の充足を許し、大多数の成員の意思が全体の意思を決定しているとされている状態である。

エチオーニは、このような「虚偽性の増大が近代から脱近代 (post-modern) への移行を特徴づけて来ている」⁽⁶⁾と考え、虚偽についての実証的な研究の必要性を指摘している。そして彼は、そのような虚偽性についての実証的な研究のためのひとつの方法として、コストの測定が有効であるとしている。ここで、疎外および虚偽とコストとの関係について、簡単に説明しておきたいと思う。

エチオーニはまず、「存続モデル (survival model)」に対して「有効性モデル (effective model)」⁽⁷⁾を対置するという形で、ある特定の社会的条件が維持される際に、そこで要求される種々のコストに注目する必要性を強調し、それらのコストと疎外および虚偽との関係について論じている。彼は、社会的諸条件が疎外的であればあるほど、すなわちそれらが成員の基本的諸欲求に即さ

ないものであればあるほど、それらの諸条件を維持するためには、より多くのコストが必要とされることになる、としている。逆に言えば、人々が現状に満足しているか否かにかかわらず、あるいは人々が疎外の存在に気づいているか否かにかかわらず、コストの多少を測定することによって、疎外の程度を明らかにすることができることになる。そしてまた、主観的な条件（成員が現状に満足しているか否か、あるいは全体の意思決定に大多数の成員の意思が十分に反映されていると感じているか否か）と客観的な条件（社会的コストとパーソナル・コスト）とを組み合わせることによって、虚偽性の程度を明らかにすることも可能となる。すなわち、虚偽的状态とは、人々が主観的には現状に満足しているにもかかわらず、そこで支払われているコストが大きい状態である、とすることができる。

このような、ある特定の社会的諸条件を維持するためのコストは、社会的コストとパーソナル・コストとに分けられる。簡単に言えば、社会的コストとは、特定の社会的諸条件を維持するために社会の側に課せられるコストであり、パーソナル・コストとは、その社会の成員の側に課せられるコストである。社会的コストは、さらに社会化のコストと社会統制のコストとに分けられる。社会化のコストとは、成員をある役割に社会化するのに必要なコスト、すなわちそのために使われる時間、資源、配慮、人力等々である（たとえば教育にかけられる時間、費用等々）。また社会統制のコストとは、ある役割についている人間を、そこでの役割期待に応じさせるための社会統制に必要なコスト（時間、資源、配慮、人力等々）である（たとえば警察機構を維持するための人員や費用）。

これに対してパーソナル・コストとは、ある役割に社会化される際に、またある役割を遂行する際に、個々の成員の側に課せられる種々の主として心理的な負担である。そこには、様々な種類のフラストレーション、精神疾患、心身症、心理的緊張といったものが含まれている。要するに、エチオーニは、特定の社会的諸条件を維持するためにその社会の成員に課せられる（主として心理的な）種々の犠牲を、パーソナル・コストという概念にまとめ上げているので

ある。

II. 調査の目的

今回の調査は、個人的なレベルでの虚偽性に焦点を合わせている。個人的なレベルに限って問題にした場合には、虚偽の状態とは、パーソナル・コストを払っているにもかかわらず、そこで生じるフラストレーションが意識されていない状態と言うことができる。すなわち、現状に対して不満ではなく満足を感じているが、それと同時に多くのパーソナル・コストを支払っている人間は、虚偽的であると言える。

しかし、現状に満足しているといっても、その内容は多様であると考えられる。したがって、満足感の種類によって、その虚偽性の程度が異なってくることは、当然考えられることである。それゆえ、個人的レベルでの虚偽性一般を問題とする前に、満足感の種類と虚偽性との関係を明らかにしておく必要がある。

ある満足感が虚偽的であるということは、その満足感が、パーソナル・コストを支払うことによって得られたものであるということの意味している。したがって、支払われているパーソナル・コストの量と満足感の程度との間に正の相関関係が見られる場合、その満足は虚偽的なものであると考えることができるだろう。今回の調査の目的は、満足感をいくつかの種類に分け、その各々とパーソナル・コストとの相関を調べることによって、それらの満足感の虚偽性の程度を比較することにある。

III. 調査のデザイン

(1) 調査対象

都内の国立A大学、国立B女子大学、私立C女子大学、横浜市内のD専門学校の、男子学生27名、女子学生162名、計189名。

(2) 調査時期 1973年7月。

(3) 方 法 質問紙を各人に配布し、記入後回収。

(4) 質問紙の内容

質問紙は次の4つの部分に分けられている。

最初の部分には、満足感・不満感に関する27の質問項目が含まれており、その各々の項目は、質問の内容に応じた五段階の選択枝の中から回答を選択するように指定されている。集計にあたっては、その質問に対して最も強く同意するものに5点、以下4点、3点、2点、そして最も強く同意を拒否する者に1点が与えられている。(たとえば、「あなたは現在の社会に対して満足していますか?」という質問に対して、「満足している」——5点、「どちらかといえば満足している」——4点、「特に満足でも不満でもない」——3点、「どちらかといえば不満である」——2点、「不満である」——1点。)

二番目の部分は、ブラッドバーン & カプロヴィッツが『幸福についてのレポート』⁽⁸⁾の中で使った、「積極的感情 (positive feeling)」と「消極的感情 (negative feeling)」についての質問を基にして作られた、12の質問項目を含んでいる。その各々の項目は、そこに書かれてある感情を感じた日が、過去一週間の内に何日あったかを尋ねている。回答は、0日 (1点)、1~2日 (2点)、3~4日 (3点)、5日以上 (4点) の4段階のうちから選択するよう指定⁽⁹⁾されている。

三番目の部分と四番目の部分は、パーソナル・コストの測定を目的としている。三番目の部分は、主として心身症的な症状をどの程度感じているかを尋ねる、8つの質問項目を含んでいる。回答は、感じたことがない、時々感じる、よく感じる、ほぼ毎日のように感じるの5段階のうちから選択するように指定されており、それぞれの選択枝には5・4・3・2・1の得点が与えられている。四番目の部分は、一般に市販されている薬物および酒煙草の使用頻度を尋ねる8つの質問項目を含んでいる。回答は5つの選択枝のうちから選ぶよう指定されており、頻度の多い順に5・4・3・2・1の得点が与えられている。

IV. 結果の分析

(1) Q技法による因子分析

標本に男女間のかたよりが大きいため、まず標本全体をQ技法による因子分析（主因子法）にかけ、男女別の因子が現われるかどうかを調べたが、第5因子までには、それと考えられる因子はあらわれなかった（第5因子の寄与の全分散比3.3%、第5因子までの寄与の和の全分散比54.1%）。また第1因子（寄与の全分散比34.2%）の因子負荷量の非常に低い4名（第1因子の1人当りの寄与の平均 .34のところ、この4名は .06以下）を、これ以後の分析から除くことにした。この4名はすべて女子であり、したがって以後の分析に使われる標本数は、男子27名、女子158名、計185名である。

(2) 部分別の因子分析

1. 満足感・不満感に関する27項目を主因子法により因子分析し、その結果をジェオマックス法により2. 3. 4. 5. 6因子構造による回転を行なった結果、6因子型の因子構造が最も適切であると判断された（第6因子までの寄与の和の全分散比52.2%、回転前の第6因子の寄与の全分散比4.7%）。回転後の因子構造および各項目の平均と標準偏差は、表-1 に示されている。これら6つの因子は、次のように名づけられた。第1因子（対人満足感因子）——この因子の負荷量の高い項目は、主として、身近な人から好意的な評価を受けているかどうかに関する項目である。第2因子（政治社会的満足感因子）。第3因子（充実感因子）——この因子の負荷量の高い項目には、精神的な充実感（たとえば生活にはりがあるとか、目標があるとか、仕事が楽しいといった）が多く含まれている。第4因子（充足感因子）——この因子は性格が多少不鮮明であるが、日常生活での充ち足りた安定した幸福感をあらわす因子と考えることができるだろう。第5因子（物質的満足感因子）——この因子は、住居とか収入といった生活の物質的な側面での満足感をあらわす因子であると考えられる。第6因子（自由感因子）——この因子は、自由で気ままな生活をしていると感じているかどうかに関する因子であると考えられる。
2. 「積極的感情」と「消極的感情」に関する12項目を主因子法により因子分析したところ、回転するまでもなく、「積極的感情」と「消極的感情」の2つの因子が得られた。因子構造および各々の項目の平均と標準偏差は、表-2に

表-1

[N=185]

項目	因子→	I	II	III	IV	V	VI	h ²	平均	SD	NA
21	世の中の役に立っている	-.71	-.17	.03	-.08	.06	-.04	.55	1.23	1.12	0
14	まわりの人からたよりにされている	-.58	.16	.26	.40	.26	-.08	.66	2.28	1.05	0
26	他人から尊敬されている	-.58	.20	.14	.09	.26	-.10	.48	2.04	0.58	3
20	信仰をもっている	-.49	-.27	.00	-.13	-.20	-.09	.37	0.85	1.29	2
15	まわりの人から愛されている	-.46	.18	.17	.41	.11	-.22	.50	2.63	1.03	1
4	現在の社会に満足	.07	-.77	-.13	.11	.21	.30	.76	1.21	1.07	2
5	現在の政治に満足	-.04	-.69	-.14	.06	.17	.46	.75	0.83	0.87	1
13	忙しい	-.13	-.13	.67	.30	.07	.07	.58	2.99	1.18	0
7	生活にはりがある	-.23	-.23	.62	.28	.10	-.41	.74	2.51	1.29	0
22	仕事(勉強)が楽しい	-.08	-.25	.58	.05	.10	-.35	.53	2.34	1.26	2
19	やるべきことをやっている	-.06	-.08	.54	.33	.03	-.29	.49	1.90	1.12	1
27	生活に目標がある	-.32	-.20	.52	.18	.10	-.18	.48	2.41	1.28	1
16	性的に満たされている	.11	-.03	.06	.63	-.02	.30	.50	1.95	1.08	15
12	生活が安定している	-.11	.04	-.53	.61	.22	-.26	.50	2.68	1.25	0
1	現在幸福である	-.05	-.22	.15	.54	.28	-.30	.53	3.03	0.90	1
10	健康である	-.12	-.28	-.38	.48	.02	-.17	.49	3.06	1.02	0
9	物質的に豊かな生活をしている	-.20	-.20	-.17	.11	.67	-.10	.59	2.56	1.06	0
6	現在の住居に満足	.09	-.06	.11	-.05	.67	.01	.47	1.70	1.35	2
8	収入に満足	-.04	-.24	-.22	.26	.60	-.19	.57	2.44	1.06	0
11	家庭生活に満足	.06	-.13	-.21	.35	.42	-.21	.41	2.80	1.17	3
24	自由な時間がある	.13	-.04	-.34	.04	.17	-.69	.64	3.01	1.23	1
18	好きなことをしている	.00	-.35	.46	.14	-.14	-.55	.68	3.05	1.08	1
23	自由である	.07	-.44	-.09	.03	.22	-.48	.49	2.89	1.24	1
2	一年前は現在よりも幸福であった	.16	.12	-.23	.06	-.17	.21	.19	1.81	1.02	1
3	将来は今よりも幸福になる	-.38	-.12	-.31	.25	-.41	-.10	.50	2.58	1.03	7
25	現在の地位に満足	-.01	-.19	.04	.29	.28	-.33	.31	2.46	1.22	6
17	友人にめぐまれてい	-.18	-.30	.13	.31	-.13	-.31	.35	3.09	1.04	1
	寄与	2.13	2.17	2.71	2.43	2.25	2.41	14.10			
	全分散比(%)	7.9	8.0	10.0	9.0	8.3	8.9	52.2			
	共通因子分散比(%)	15.1	15.4	19.2	17.2	16.0	17.1	100.0			

表-2

[N=185]

項 目	I	II	h ²	平均	SD	NA
11 ゆうつになる	.82	-.19	.70	2.21	0.92	5
4 いらいらして落ち着かない	.77	-.05	.60	2.09	0.98	5
12 何もやる気がしない	.76	-.19	.62	2.07	1.01	4
10 人とのへだたりを感じる	.76	.05	.57	2.27	0.97	5
7 なんとなくさみしい	.71	.05	.51	2.39	1.01	6
8 悲しくて泣きたくなる	.71	.10	.52	1.74	0.85	6
2 なんとなく不安である	.70	.07	.50	2.40	1.00	6
5 たいくつになる	.57	-.15	.35	1.67	0.96	6
6 人からほめられてうれしい	.16	.67	.48	1.46	0.56	7
9 うきうきする	.05	.69	.47	1.83	0.70	6
1 何かをやり終って非常にうれしい	-.04	.77	.59	1.82	0.69	6
3 何かに夢中になる	.05	.79	.62	2.05	0.92	6
寄 与	4.27	2.22	6.49			
全分散比 (%)	35.6	18.5	54.1			
共通因子分散比 (%)	65.8	34.2	100.0			

示されている。

3. 症状に関する8項目を主因子法により因子分析し、第4因子まで求めたが(第4因子までの寄与の和の全分散比68.2%。第4因子の寄与の全分散比11.5%)、第1因子以外の因子には、ほとんど意味が見出されなかった。表-3に

表-3

[N=185]

項 目	第1因子	平均	SD	NA
5 頭 痛	.66	2.50	0.99	10
4 はきけ	.66	1.94	0.83	10
1 胃の痛み	.63	2.33	0.97	10
3 食欲不振	.62	2.30	0.90	10
7 下 痢	.53	2.27	0.85	11
2 腰の痛み	.51	2.09	0.94	10
8 便 秘	.25	2.54	1.06	11
6 ぜんそく	.20	2.27	0.59	10
寄 与	2.30			
全分散比 (%)	28.8			

は、第1因子のみが示されている。

4. 薬物の使用に関する8項目を主因子法により因子分析し、第4因子まで求めたが(第4因子までの寄与の和の全分散比71.6%, 第4因子の寄与の全分散比11.8%), 第3, 第4因子には、明確な意味づけが不可能であった。第1因子は薬物、第2因子は酒煙草の使用に関する因子と考えられる。表-4には、第1因子と第2因子のみが示されている。

表-4 [N=185]

	I	II	平均	SD	NA
5 ビタミン剤	.76	-.22	1.70	0.78	7
6 疲労回復薬	.72	-.07	1.39	0.68	7
8 鎮痛剤	.55	-.12	1.74	0.80	7
7 胃腸薬	.53	.03	2.23	0.89	7
3 睡眠薬	.47	.07	1.07	0.30	7
4 精神安定剤	.37	-.10	1.17	0.50	7
1 酒	.17	.84	2.52	0.74	7
2 煙草	-.16	.83	1.91	1.13	7
寄与 全分散比(%)	2.09 26.1	1.50 18.8			

(3) 尺度の構成

部分別の因子分析により析出された、以上の11の各因子の負荷量の高い項目を選び出して以下の11の尺度を構成した。各尺度の内の一貫性は α 係数により示されている。対人満足感尺度——I-14, I-15, I-20, I-21, I-26の5項目により構成($\alpha = .61$)。政治社会的満足感尺度——I-4, I-5($\alpha = .80$)。充実感尺度——I-7, I-13, I-19, I-22, I-27($\alpha = .80$)。充足感尺度——I-1, I-12, I-16。($\alpha = .51$)。物質的満足感尺度——I-6, I-8, I-9, I-11($\alpha = .66$)。自由感尺度——I-18, I-23, I-24($\alpha = .51$)。消極的感情尺度——II-2, II-4, II-5, II-7, II-8, II-10, II-11, II-12($\alpha = .98$)。積極的感情尺度——II-1, II-3, II-6, II-9($\alpha = .69$)。症状尺度——III-1, III-3, III-4, III-5, III-7($\alpha = .62$)。酒煙草尺度——IV-1, IV-2($\alpha = .63$)。薬物使用尺度——IV-5, IV-6, IV

—7, IV—8 ($\alpha=.61$)。これらの尺度に対する各人の得点は、各尺度に含まれている項目の得点の和を、そこに含まれている項目数で割ることによって算出されている (NAがある場合は、その項目の得点を0とし、項目数からNAの数を引いた数で割ってある)。

(4) 尺度間の相関

これら11の尺度間の相関および各尺度の平均と標準偏差は、表-5に示されている。この相関表から明らかになるのは、次の諸点である。

表— 5

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均	SD
1 対人的満足感	-.06	.42	.28	.18	.11	-.33	.20	.01	-.17	-.05	1.82	0.64
2 政治社会的満足感		.04	.15	.20	.09	-.00	.09	-.11	.01	-.01	1.45	0.71
3 充実感			.27	.21	.26	-.49	.25	.17	-.13	.04	2.47	0.86
4 充足感				.43	.27	-.34	.17	-.15	-.30	-.05	2.70	0.72
5 物質的満足感					.26	-.18	.17	-.13	-.22	-.06	2.39	0.86
6 自由感						-.18	.24	.01	-.07	.01	3.03	0.82
7 消極的感情							.03	.08	.12	.24	2.11	0.69
8 積極的感情								-.01	-.09	.05	1.79	0.53
9 症 状									.17	.45	2.27	0.58
10 酒・煙草										.05	2.21	0.81
11 薬 物											1.77	0.54

1. 政治社会的満足感尺度は、物質的満足感を除く、満足感に関する他の4尺度とは有意な相関をもたない。これに対して、政治社会的満足感を除く、満足感に関する他の5つの尺度の間には、対人満足と自由感とを唯一の例外として、すべての組合わせに有意な正の相関が見られる。この結果は、政治社会的な満足感・不満感が日常的な問題に対する満足感・不満感とは異なった基礎^(1r)の上に成り立っていることを示唆していると思われる。
2. 積極的感情および消極的感情は、双方とも、政治社会的満足感を除いて、満足感に関する他の5つの尺度と有意な正の相関をもっている。
3. 症状尺度は、充実感との間に正の、充足感との間に負の有意な相関をもっている。
4. 酒煙草尺度と対人満足、充足感、物質的満足感の各尺度との間には、有意

な負の相関が見られる。

5. 薬物使用尺度と、満足感に関する6尺度の間には有意な相関は見られないが、消極的感情尺度との間には有意な正の相関が見られる。
6. 症状と薬物との間にはかなりの正の相関が見られるが、酒煙草とこれら両者の間にはほとんど相関が見られない。

V 考 察

今回の調査の目的は、種々の満足感とパーソナル・コストとの間の相関関係を調べることによって、それらの満足感の虚偽性の程度を比較することにあつたが、以上の結果から虚偽的であると判断されるのは（すなわち、パーソナル・コストとの間に正の相関が見られるのは）、充実感のみである。すなわち、充実感と症状との間には、あまり高くはないが有意な正の相関が見られる。また、積極的感情、消極的感情および充足感の間の相関関係から、〈積極的感情→充実感←消極的感情〉という影響力の方向が予想される⁽¹¹⁾。したがって、充実感と症状、および充実感と薬物の間で、独立変数である消極的感情をコントロールして偏相関をとることは可能である。消極的感情をコントロールした場合には、充実感と症状との偏相関係数は .24であり、充実感と薬物との偏相関係数は .19である。

以上のことから、生活に目標とはりがあり、忙しいが仕事（あるいは勉強）が楽しく、やるべきことをやっていると感じている精神的な充実感が高ければ高いほど、心身症的な症状や薬物の使用に代表される、より多くのパーソナル・コストを支払っているといえることができるであろう。満足感に関する6尺度のうち、なぜ充実感のみが虚偽的であるかを明らかにすることは、今後に残された課題である。

また、酒煙草がパーソナル・コストに関する他の2つの尺度とほとんど相関をもたず、満足感に関するいくつかの尺度と有意な負の相関をもっていることは、エチオーニの言うような「パーソナル・コストについてのグローバルな尺

度」を作ることの困難さを示唆しているように思われる。⁽¹²⁾

【註】

(1) Etzioni 1968 a, 1968 b.

(2) 彼は「疎外」を、「行為者のコントロールすることのできない、それゆえ彼の基本的諸欲求に即さない社会状態」(1968 b, p.879)と定義している。

(3) Marcuse 1955.

(4) 見田 1968, pp.189~190.

(5) エチオーニがここで述べている「人間としての基本的諸欲求」とは、動物の世界にも見られるという生理学的な意味での基本的欲求なのではなく、もっと人間的な、つまり人間に固有な欲求である。

具体的には、彼は、affecton, recognition, context, respected gratification, stability, variance in a social structure などに対する欲求を挙げている。(Etzioni 1968 a, pp. 622—626, 1968 b, pp. 871—872.)

(6) エチオーニは、このような虚偽化の進行の徴候として、マスコミの技術進歩、宣伝とPRのための投資の増大、消費者の好みを探るための社会科学の質の向上、他人指向的な価値の増大、疑似的参加の増大、プロテスタントの質の変化(ヒッピーなど)といったものを挙げている。(Etzioni 1968 a, p. 633, 1968 b, p.883.)

(7) 人間の欲求の可塑性には一定の限界が存在しているという立場から、エチオーニは、デニス・ロングが「現代社会学における社会化過剰の人間観」(Wrong 1961)と名づけた考え方を批判し、その人間観を前提としている社会学上の存続モデルが不十分なものであることを指摘している。存続モデルは、組織の存続を可能とするための一組の必要条件を扱っている。この存続モデルは、社会体系あるいは組織が存続するための条件を示しているが、現実に存在している組織や社会体系の間の差異を説明することができない。したがって、複雑な組織を研究する場合には、存続モデルよりも有効性モデルを使った方が、より得るところが大きい。有効性モデルは、組織が存続するか否かだけではなく、組織がその目標をどの程度実現し、そのためにどれだけのコストが必要であるかという、組織の有効性をも考慮に入れているからである(Etzioni 1964, 1968 b)。

(8) Bradburn & Caplovitz 1965.

(9) これらの項目を今回の質問紙に含めた理由は、ブラッドバーンとカプロヴィッツが、これら二つの感情の間にはほとんど相関が見られないが、積極的感情と幸福感との間、および消極的感情と「不安」(これはエチオーニのパーソナル・コストにほぼ相当する項目から構成されている)との間に、それぞれ相関が見られることを報告しており、したがって消極的感情は、無意識的なフラストレーションがある程度意識化されたものである可能性が考えられるからである。しかし本稿においては、この点についての分析は行なわれていない。

(10) 調査対象が学生であることを考えると、政治社会的な満足感や不満感は、イデオロギー的な要素によって左右される部分が大きいと思われる。

(11) この影響力の方向性の分析に関しては、Blalock 1971 を参照されたい。

(12) エチオーニは、社会的コストに比べて個人的コストの測定にはより多くの困難がともなうであろうとしながらも、その測定は可能であると考え、その理由を次の三点に求めている。(1) 個々の特定のパーソナル・コストではなく、パーソナル・コストの全体的尺度 (global score) をつくり出すことができれば、特定の役割と特定のパーソナル・コストとの間に一対一の対応関係が存在しなくとも、パーソナル・コストの意味のある測定は可能である。(2) そのような全体的尺度をつくらなくとも、少数の主要なパーソナル・コスト、たとえば主要な精神疾患や身心症などの発生率を比較することによって、その代用とすることができる。(3) また、フラストレーションの種類と特定のパーソナル・コストの間には厳密な一対一の対応関係は存在しなくとも、大まかな形での対応関係は存在していると考えられる。(Etzioni 1968 b, p. 874) したがって、グローバルな尺度を作ることが困難であると言うことは、パーソナル・コストの測定が不可能であるということの意味ではない。

〈引用および参考文献〉

- Bradburn, Norman M. and David Caplovitz (1965), *Reports on Happiness: A Pilot Study of Behavior Related to Mental Health*, Chicago: Aldine.
- Blalock, Hubert M., Jr. (ed.) (1971), *Causal Models in the Social Science*, Chicago: Aldine.
- Etzioni, Amitai (1964), *Modern Organizations*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Etzioni, Amitai (1968 a), *The Active Society: A Theory of Societal and Political Processes*, New York: Free Press.
- Etzioni, Amitai (1968 b), "Basic Human needs, Alienation and Inauthenticity," *American Sociological Review*. Vol.33-2.
- Marcuse, Herbert (1955), *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, Boston: Beacon Press.
- Wrong, Dennis H. (1961), "The Over Socialized Conception of Man in Modern Sociology," *American Sociological Review*. Vol. 26-2.
- 見田宗介「社会意識論」綿貫譲治、松原治郎編『社会学研究入門』東大出版会 1968年。
- 芝祐順『因子分析法』東京大学出版会1972年。

〈付 記〉

今回の調査結果のデータ処理にあたっては、一橋大学 FACOM230-25 システムを使用した。システム利用にあたり、計算機室の方々に大変お世話になった。記して感謝したい。

(筆者の住所：東京都国立市中 2-18-9)